五代教主作 灰釉茶盌 銘「瑞の光」

題字 出口直日

通巻 第５１５号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL 03-3821-3701
(IP) 050-5510-9502
FAX 03-3821-5283
URL http://oomoto-tokyo.com
E-mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

無始無終無限の宇宙も伊都能売の
神の守りに開け行くなり

出口王仁三郎聖師

オリオン星座

祭務課主事　井畑　太

〝火星六万年ぶり大接近!!〟という天文ビッグニュースが平成十五年にありました。〝六万年ぶり〟という時間のスケールに、天文ファンでもない私でも驚かされました。

聖師さまは、大正十三年（この年も火星が地球に接近した）十二月、次のようなお歌（『東の光』）を詠んでおられます。

天も地も万物更始の秋の空に火星ちかづき光りかがやく
主の神は天と地とに不可思議を示したまへどさとるものなし

また『玉鏡』に、「月は母体」という見出しで『星は月から生まれた・・・星のうちではオリオンの三つ星が一番に生れたので、これは月の総領である・・・』と示されています。

この〝オリオンの三つ星〟というのはご承知の通り、冬の星座で有名なオリオン星座の三つ星のことですが、聖師さまは第二次大本事件の回顧歌集『朝嵐』には、

オリオンの星座は拘置室を謂ひ星は月座の月の教子なり
オリオンの星座に吾は潜みつつ御国のために雄猛びつづくる

など、多くのお歌を詠まれていますが、オリオン星座は、聖師さまが囚われているところの刑務所をオリオン星座に例えてお詠みになっていることはご承知の通りです。

この冬も夜空に輝くオリオン星座。その星座の左上の角の星〝ベテルギウス〟という名前で、直径は太陽の一千倍だそうです。が、この星は今にも爆発して無くなる（超新星爆発＝壮絶な星の最期）ということで、世界中の天文学者の目が、この星に釘付け状態だというのです。いま見ているこの星の光は六四十年前のものだから、現実にはもう無くなっているのでは？　という学者もいるそうです。

はたして主の神は、何を悟れと・・・・・。

第106回「21世紀、生きがい講座」より

世界に活動する大本

講師 浅田秋彦（あさだ ときひこ）
（東京宣教センター長）

大本の使命

本年は、明治二十五年に大本が出現してから百二十年の佳節の年を迎えました。

大本には、大きな使命があります。その使命の前に、私たち全てのものにも使命があります。

大本の教祖・出口王仁三郎は『人生の真（しん）目的は地の上に無窮（むきゅう）の天国建つるにありけり』と教えています。

この地上に天国「みろくの世」を創ることが人類に与えられた使命で、それに従っていると、人はとても幸せであるのです。逆に逆らっていくと、苦しく生きにくいということが言えます。

日本という国は大きい使命を持っています。単なる世界の一国という意味ではなく、身体でいうと心臓の部分である中心に存在しています。

今の世の中は、強いもの勝ちの悪魔ばかりの世、末法の世とも言われる非常に厳しい状況になっています。

その世界の大掃除をして、生物、動物、鉱物などあらゆるものすべてが統一された地上天国を創るという目的のために、神さまが私たち生きとし生けるものに使命を与えて下さっているのです。

型の大本

では、どのように進めていかれるかと言いますと、日本を中心に、一つの型として進められました。

ビルなどを作る際には、はじめに図面や模型（雛形）を作ることがあります。神さまも宇宙をつくるために、雛型を作ってから、世界をつくられました。

その雛型が大本であり、大本に起きたことは日本に起こり、そして日本に起きたことは世界に起こる型となっています。統一された地上天国建設のため、神さまは大本を型として、立替えを進められているのです。

そこで、型を出す大本の現在の活動をご紹介します。

生命を守る活動

まず一つ目に生命倫理問題への活動があります。大本は「脳死による臓器移植」に反対をしています。現在では、多くの宗教が反対の姿勢を示していますが、大本が反対運動をはじめた平成十三年ごろは、他の宗教はあまり積極的ではありませんでした。

大本だけが積極的に街頭活動や署名活動をして、反対を訴えてきました。それは、とても大きい意味があります。

大本では、人は亡くなっても霊魂は永久に生きどおしで、心臓と肺臓（呼吸）の停止と瞳孔の対光反射消失をもって、人の死となり、肉体から霊魂が離脱すると教えられています。

ですから人工呼吸器の力を借りているとはいえ、心肺が動いている脳死と言われる状態からの臓器移植は、霊魂が宿った状態での移植になります。これは自殺行為と同じで大変なことであり、霊界で迷える魂となってしまいます。

さらに医学的に見ても、臓器を摘出する際にドナーに麻酔をかけるなど、不可解な点が多いです。

また、死刑廃止運動も推進しています。

王仁三郎は『元来、刑法の目的は遷善懺悔（せんぜんざんかい）にあるので、復讐的であってはならない。殺してしまっては改善の余地がなくなるではないか。人を殺したから殺してしまうというのは、復讐的で愛善の精神に背反するもので、実によろしくない』と示しています。

これは霊界に行くまでに、きちんと悔い改めて、本当に悪かったという気持ちを持たない限りは死刑にしても解決にはなりません。また先の霊界観から見ても、死刑は法による殺人であり、本来の人の死とは言えません。さらには誤った裁判（冤罪）で無罪の人が死刑になってしまってはなりません。

このような生命倫理問題に対して、大本では活動を行っています。

宗教協力の実現

二つ目に、大本には、すべての宗教の根源は同じ神さまであるという「万教同根」の教えがあり、その精神に基づいた宗際化活動を展開しています。宗教間の争いをなくし、和合していくことです。

大正十四年に北京で世界宗教連合会を発会し、世界のさまざまな宗教の代表が集まる会議を催しました。ここで、すべての宗教を一つの方向にしていこうという、働きがはじまりました。

これを受けて昭和五十年、アメリカ・ニューヨークにある聖ヨハネ大聖堂において、大本祭式による祭典が執行されました。一神教であるキリスト教の教会で、他の宗教が祭典を執り行うことは普通では考えられない画期的な出来事でした。

そしてその祭典を受けて昭和五十二年には大本の聖地の一つである綾部・梅松苑のみろく殿に聖ヨハネ大聖堂長を迎え、聖公会と大本の合同で全人類の平和を祈る祭典が執行されました。この祭典が本格的な宗際化のはじまりとして、大きな一歩となる型になったのです。

現在では国内だけでなく、海外においても宗教指導者が集まり、それぞれの教えを紹介したり、合同礼拝などを執り行ったりして交流が図られています。

近年の大本では、モンゴル仏教や台湾の道院などに於いても祭典を行い、世界に向けて発信しています。

三つ目は、世界を一つにする「世界連邦運動」です。

現在、世界には百九十六の国があり、それぞれが境界を作っています。そして、いろ

いろな場所で争いや領土問題が発生しています。日本でも尖閣諸島や竹島、北方領土などの問題が身近にあります。世界連邦ができれば、こういった争いはなくなるのです。

日本では明治時代、廃藩置県によって各地方の争いはなくなりました。この廃藩置県を世界規模で行うのが世界連邦運動です。

終戦後、王仁三郎は鳥取県の吉岡温泉で朝日新聞のインタビューに答えました。

『今、日本は軍備はすっかりなくなったが、これは世界平和の先駆者としての尊い使命が含まれている。本当の世界平和は全世界の軍備が撤廃したときにはじめて実現され、いまその時代が近づきつつある』

昭和二十三年一月に王仁三郎が昇天した後、出口すみ子二代教主が世界連邦運動を推進しました。そして昭和二十五年、綾部市が地方自治体として初めて世界連邦都市宣言を行いました。

それから五十五年後の平成十七年、日本の国会に於いて世界連邦の実現へ向けて決議が成立しました。

このように世界連邦運動においても、大本が一つの型になっています。

心と身体を養う食育

四つ目は、食の安全を守ることです。農・食・環境問題に取り組んでいます。

出口なお開祖の筆先に『金銀を用いでも、結構に、お土から上がりた物で国々の人民が生ける様に気楽な世になるぞよ』とのお示しがあります。

日本の国で採れた物をいただき、天産物自給経済を進めることが説かれています。

具体的に大本では、愛善酵素農法というお土を酵素によって甦らせる方法を進めています。農薬ではなく、自然の法則を利用した方法です。

食の安全を守るために、農薬や化学肥料、遺伝子の組み換え作物などに頼らずに、天然の物をいただく〝正食〟を勧めています。

具体的には、春夏秋冬の旬の物を食べる〝季節食〟。夏に採れるトマトやキュウリは体温を下げ、ゴボウやレンコンなど冬に獲れる野菜は身体を温める作用があり、体調にも良い影響を与えます。

またそれぞれの土地の物を食べる〝国土食〟。ダイコンやニンジンであれば葉っぱまで、小魚であれば、頭から尾までまるごとをいただく〝全部食〟など、自然に適ったこの三つが正しい食生活が基本的な考え方です。

そして何より大切なことが、感謝をしていただくということです。心を神さまに、そして生産者や調理してくれた人に向けて、有り難いという気持ちを持たないと、せっかく食べた物も栄養にはなりません。

美を通して神に近づく

五つ目は、芸術です。

王仁三郎の教えに『芸術は宗教の母なり』というものがあります。

全大宇宙、そしてこの大自然や私たち生きとし生けるもの全てが神さまの大芸術作品であり、芸術や美を親しむことから全てを創造された神さまのみ心にだんだんと近づくことができるという考え方です。

聖師は終戦後、一年余りの短期間に三千個を超える茶盌を作陶しました。のちに「耀盌（ようわん）」と呼ばれるもので、昭和四十七年にはフランスをはじめ欧米六カ国、十三会場で「出口王仁三郎とその一門展」と題した作品展が催されました。外国の方は、耀盌を見て、深い興味と感心を持たれ、さらにはその奥から神を感じたのです。

平和の祭典・大本歌祭

六つ目は、世界共通語エスペラントです。

宗際化や世界連邦運動と深く関わってくる運動ですが、世界を一つにした時に、共通の言葉が必要になるので、世界連邦を進める中でエスペラントを見据えています。

それぞれの国の母国語は尊重して、中立公平なエスペラントを用いて互いの意志の疎通を図ることを目的としています。

大本の海外拠点であるブラジルの首都・ブラジリアには、エスペラントを用いて大本の教えを取り次ぐ大本インテルナツィーアが平成十七年に開設されています。

七つ目は、大本歌祭です。世の中の有形無形さまざまな障害を取り除き、世界平和の実現を祈る祭典です。

昭和十年に第一回の大本歌祭が大本の聖地・天恩郷（亀岡市）で執行されて以来、節分の大祓神事と並ぶ重要な神事です。

歌祭がなぜ平和の祭典なのかというと、これは平成十八年、京都能楽堂での歌祭のことです。来賓に駐日イスラエル大使とパレスチナ代表部代表をお迎えし、それぞれに平和の願いを込めた歌をお供えいただきました。

ご存知の通りこの両国は、長年に渡り戦争状態にあります。しかし、それぞれは平和を求め、祈る人々なのですが、国家レベルとなると和解は容易ではありません。

ところが、その国の代表である大使・代表が大本歌祭に参拝し、終了後に握手を交わしたのです。これは普通ではあり得ないことで、大本歌祭だからこそ実現したのです。

祓いと平和の神事である大本歌祭を通して、世界に向けた平和運動につながっていくことがわかると思います。

これを全世界に広げていくのです。特にユダヤ教、キリスト教、イスラムの聖地があるイスラエルのエルサレムというところは、激しい争いが絶えない状態にあります。そのエルサレムの地で歌祭を執り行うことが、現在大本が目指しているところです。

出口紅五代教主は『わが願ひエスペラントの歌まつり人類同胞（はらから）こぞりてエルサレムの野に』と和歌に詠んでいて、エルサレムでの歌祭を執行し、世界平和を実現したいとの願いが込められています。

その実現に向けて平成二十二年、ブラジリアでエスペラントによる歌祭が行われました。

一人ひとりの心の中に

神さまは大本の一つひとつの活動を通して、世界の平安、そして地上天国「みろくの世」実現のために進めています。

そのためにも私たち一人ひとりは、まずそれぞれ心の中に「みろくの世」を築くことが必要です。それが型となり、大本から日本へ、日本から世界へ、世界から宇宙へと拡がっていくのです。このことが私たちの大きい使命と思い、現代の大本は活動をしています。

平成24年東光苑新年祭

平成二十四年壬辰東光苑新年祭は一月一日、午前七時より斎主・森良秀東京宣教センター次長のもと執行され、百二十三人が参拝した。

祭典後、参拝者全員で教主さまのお写真に年賀のごあいさつを申し上げたのち、教主さまの新年ごあいさつを映像を通して拝聴。最後に浅田秋彦東京宣教センター長が新年のあいさつをのべた。

その後、お神酒接待を行ったほか、食堂にて神代餅の直会をいただいた。

なお、正月三が日の参拝者数は、三百八十七人だった。

大本常設対外講座 好評開催中

開催曜日 毎週：月・水・金曜日　**参加費** 無料

昼の部【講話】午後２時～３時３０分

夜の部【実習】午後７時～８時３０分

※ただし、毎月第３水曜日の〝夜の部〟と、２月３日（金）は「節分大祭遥拝祭」執行のため休講いたします

場　所 ８階ミーティングルーム（昼の部）、３階教務室（夜の部）

内　容 ［昼の部］講話：月曜日「人生の目的」

水曜日「人生を豊かに生きるために」

金曜日「あの世を知ってこの世を生きる」

［夜の部］実習：礼拝・鎮魂・修座・浄書（各曜日共通）

七草粥接待

一年の無病息災を願う七草粥接待は、一月七日午前十時三十分から午後三時まで行われ、遠近各地より百九十六人が入席した。

七草は栃木主会東山分所周辺で東京本部職員らが摘んだもので、当日は関東教区直心会員と本部職員が、ふんだんに炊き込まれた七草粥のほか、おすましや柚子味噌、塩昆布等を盛りつけて入席者をもてなした。

また本席の他には歴代教主さまらのお作品展示やビデオ上映、村井社中のみなさんによる接茶が行われた。

東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は一月八日、午前十時三十分から、斎主・出口京太郎大本本部相談役のもと執行され、四百人が参拝した。

祭員は福島・群馬・山梨・東京・神奈川主会の代表、少女祭員は東京主会の吉田英里香さん、神奈川主会の森澄子さん、田中綾乃さん、伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は佐々木武雄埼玉主会長、添釜は宇野社中の方々が担当した。

祭典後、浅田秋彦東京宣教センター長と出口相談役があいさつ。

続いて成人式典が行われ、最初に新成人を迎えた逢沢秀さん・野澤貞行さん・峰尾祐輔さん〈東京〉高橋優季さん〈神奈川〉神展彦さん〈東京本部直属〉の五人を紹介。次いで越中谷ゆたか直心会栃木連合会長より大本本部、直心会、大本青年部からの記念品の贈呈と祝辞がのべられ、最後に新成人を代表して逢沢秀さんが力強く答辞を述べた。

その後、新成人は東光庵の添釜に入席し、関東教区青年部主催による「成人祝賀会」に出席。新成人の門出を和やかに祝した。

出口なお・出口王仁三郎の世界を語る

第一〇七回大本公開講座『出口なお・出口王仁三郎の世界を語る』は一月十八日午後七時から八時三十分まで、港区新橋にある航空会館において、森良秀東京宣教センター次長を講師に「大本の神示と世界の将来―人類への預言と警告」と題して開催された。参加者は五十人（内、一般二十九人）。

講座では、大本出現の意義や開祖さまの「お筆先」に示された立替え立直しやみろくの世の姿について解説。「みろくの世は経済的・精神的・物質的に豊かな時代になるが、満足や幸せがそれぞれの身の丈で感じる厳しい面も持っている」と説いた。

参加者からは「物質主義の世の中で、思いやりや絆の大切さを重視して、少しでも体主霊従から霊主体従に改め直していきたい（六十一歳・男性・一般）」などの感想が聞かれた。

東光苑祭典・行事予定

2月

開教120年節分大祭遥拝祭

二代教主・四代教主聖誕祭

3日（金）午後6時半

東光苑月次祭・豊年祈願祭・市杵島姫命例祭

12日（日）午前10時半

「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」

講題 立替え立直しの仕組

―神界のプログラム―

講師 浅田秋彦（東京宣教センター長）

会場 航空会館（港区新橋）

15日（水）午後7時～8時半

教本3級認定講習会

25日（土）26日（日）

3月

東光苑月次祭・春季合同慰霊祭

11日（日）午前10時半

「出口なお・出口王仁三郎の世界を語る」

講題 一つの神、一つの世界、一つの言葉

―みろくの世への道筋―

講師 森 良秀（東京宣教センター次長）

21日（水）午後7時～8時半

東光苑春季祭式講習会

24日（土）25日（日）

二代教主六十年祭

31日（土）午前10時半

毎週月・水・金曜「常設対外講座」開催中

［昼の部］講話 午後2時～3時半

［夜の部］実習 午後7時～8時半